

〔資料〕

看護専門職の生涯学習支援としての Work Based Learning の実際

両羽 美穂子¹⁾ 布原 佳奈²⁾ 梅津 美香³⁾

Work Based Learning for Professional Development of Nurses

Mihoko Ryoha¹⁾, Kana Nunohara²⁾, and Mika Umezu³⁾

I. はじめに

平成16年度の国際交流事業では、専門職の生涯学習支援に先駆的に取り組んでいる英国において、その主要な概念である Work Based Learning (以下、WBL とする) について学んだ^{1, 2)}。この概念には、①職場の課題を意図的に学習に結びつけ、理論的な裏づけを与える、②大学などの教育機関と連携して、職場の学びを教育課程の一つとして位置づける、③学習者に協力的に関わるだけでなく支持的 (supportive) に関わる、ことが含まれていることがわかった。つまり、この概念は本学で行っている現場看護職と本学教員との共同研究や現場の課題に取り組む大学院教育に相通ずるものであり、WBL が本学の教育・研究の質の向上に貢献できうるものであることが示唆された。

そこで、2回目となる18年度は、学位につながるシステムの全体像を捉えること、WBL の成果を確認すること、これらを合わせて本学への応用を考えていくことを目的に、現地での研修を行ったので本稿にて報告する。

II. 学位に結びつく WBL の実際

1. Middlesex 大学の WBL

今回我々は、ロンドンにある Middlesex 大学の WBL コース担当講師より同校の WBL コースの実際について話を聞くことができた。

1) WBL コースについて

WBL は、実践での学びを大学レベルの学術的な学びにまで高めていく1つの方法であり、あらゆる職種に

適用されるものである。それまでの仕事、ボランティア、生活体験の中で、これから取得しようとする学位の領域に関連する体験をポートフォリオとして大学に提出し、それが認められれば、アカデミッククレジットポイント (以下、クレジットポイント、数字の単位では cp とする) となる。WBL としての学術的な研究に実際の仕事での役割や組織の目標を位置づけることは、組織やその個人に利益をもたらす。仕事での役割を強化し所属する組織での専門的な貢献が増大するので、特にフルタイムで働く人にとっては、メリットが多い。

Middlesex 大学の WBL コース³⁾ は1992年に1つの学部で始まった。学生のバックグラウンドは様々であり、役者から芸術家、警察官、エンジニア、建築家、会話ボランティア、病院管理者までいる。WBL 学習によりあらゆるレベル (高等教育資格から博士まで) の資格を得る機会を提供している。WBL コースでは、2,400人以上の学生の経験を大学の単位として認定してきた。WBL コースは下記の通りである。

- Bachelor of Arts and Bachelor of Science (BA/BSc)
Work Based Learning Studies
- Master of Arts and Master of Science (MA/MSc)
Work Based Learning Studies
- Master of Arts (MA) Professional Practice
- Master and Doctorate in Professional Studies
(Mprof/Dprof)
- Specialist Pathways

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 育成期看護学講座 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

2) 看護における WBL の実際

英国では BA/BSc (学士程度) は看護師の約 20%、Diploma in Higher Education (以下 DipHE とする) は約 80% を占める。DipHE は、レベル

1 から始まる教育段階のレベル 2、BA/BSc はレベル 3、MA/MSc (修士程度) はレベル 4 として位置づけられている。

BA/BSc (学士程度) を取得するには、表 1 に示すように計 360cp が必要である。なお、通常、BA/BSc までは 1 年間に 120cp、さらに MA/MSc の学位を取得するには、2 年間で 180cp 取得することになる。しかし、WBL コースでは、働きながら学修する形態をとっているため、大学が設定しているプログラムの単位取得時間と取得可能クレジットポイントは 1 セメスターに 40cp である。そのため、このコースの中で BA/BSc の学位を取るために 360cp 全部を取得するには 4～5 年かかる。

WBL コースの進め方について例を示す。レベル 2、DipHE の看護師が BA/BSc を取得しようとする場合、残りの 120cp をどのように取得していくか、大学の教員が査定し、学生と協議の上決定していく。資格取得に向けては、看護師は教員と相談しながらポートフォリオを作成する。そのポートフォリオに基づいて取得しようとする領域に関連した体験として認定できるか大学で検討し、認定された単位に応じて履修プログラムを作成する。ポートフォリオの中には人材育成、記録用紙の作成、方針策定など日常の業務の中での経験を記載する。その際、1 人で行ったか、チームで行ったかなどの確認が必要となり、その証明ができるものを添付する必要がある。例えば、チームで行った場合などは、その検討のための会議録などが提出される。MA/MSc の場合も同様にポートフォリオを作成し、履修プログラムを組む。BA/BSc と比べ研究の比重が高くなる。

図 1 の例では、学位取得のため必要な 120cp のうち、

表 1 BA/BSc と DipHE の資格取得の必要クレジットポイント数と教育段階

資格および学位	教育段階		
	レベル 1	レベル 2	レベル 3
BA/BSc	120cp	120cp	120cp
DipHE	120cp	120cp	

15cp は、前述したようにこれまでの経験による学びをポートフォリオとして作成し審査された結果、取得済みと認定された単位である。

また、地域のプライマリケアトラスト (Primary Care Trust : 以下 PCT とする) が実施している研修コースを、申請により大学が WBL の単位として認めているケースもある。研修コースが認定されるかどうかは、研修によって得られる単位数、到達レベルなどにより検討され、認められれば PCT の研修責任者は、内容、受講者層、人数などの報告が義務づけられている。

WBL コースを持つメリットとして、大学側にとっては、PCT からの資金調達につながり、PCT にとっては看護師あるいは資格未取得の看護学生のキャリア開発につながるということが挙げられた。

2. London South Bank 大学の WBL

London South Bank 大学保健・ソーシャルケア学部における WBL を紹介する。ここでの WBL は、Middlesex 大学とは異なり、学部として存在するのではなく、e-learning や遠隔学習などと同様に学習機会の一つとして位置づけられている⁴⁾。

この WBL のプログラムの目的は、職場でのさまざまな幅広い学習を認定することで、卒業後の Continuing Professional Development (以下 CPD とする) を最大にすることである。WBL は学生である看護職者自身の学習ニーズを満たすだけでなく、所属する組織のニーズにも応じる学習活動であり、Work based projects により実践領域に新しい知識と技術を高めることにつながっている。WBL は学生および所属する組織の双方の利益につながるのである。WBL では次のような柔軟で革新的

15cp *これまでの経験による学び	15cp 看護倫理	30cp 研究計画	60cp 論文
-----------------------	--------------	--------------	------------

図 1 BA/BSc 取得に向けた履修計画の例

な学習アプローチがあり、学位を得るための代替方法を提供している。

- ・WBL ユニットのみによるアプローチ
- ・伝統的な講義と WBL ユニットを組み合わせたアプローチ
- ・遠隔学習と伝統的な講義を組み合わせたアプローチ

London South Bank 大学では、Accreditation of Prior Learning (以下、APL とする) と呼ばれるシステムがある。これは以前に受けた公式な学習あるいは非公式な学習を学位取得に向けたクレジットポイントとして換算することで次の2つの方法がある。

① Transfer credit: 以前に受けた認定された学習を既修得単位として認める方法。ただし、既修得単位として認定された場合でも、クレジットポイント数が異なる場合がある。

② Accreditation of Prior Experiential Learning (以下 APEL とする): 以前の経験的な学習を既修得単位として認める方法である。

WBL では、公式、非公式を問わずこれまでの学習経

験を単位として認定してもらう交渉がきわめて重要とってくる。これまでの職場での経験や他校での学習が既修得単位とみなされると、その分の履修が免除されることになる。大学の実践ベースのメンターとコーチの役割は、学生と所属する組織のニーズを明らかにし、学習計画を支援することである。

London South Bank 大学における Work-based Learning Units では、表2で示したような7科目を履修することができる。

London South Bank 大学の入学要件は、①ヘルスケアの専門資格があり1年間の経験があること、②常勤もしくは週30時間以上の非常勤であること、③フィールドが確保されており、プログラムに対する雇用者の肯定的な見解とサポートがあること、④修士と Post Graduate Diploma (以下 PG Dip とする) では、学士もしくは同等以上、学士では、レベルI (レベル2) を240cp 以上取得していることである。

WBL を通して取得できる学位は表3に示す通りである。

表2 London South Bank 大学の Work-based Learning Units

科目名	レベル (cp)	評価方法
先行する経験的な学習の認定 (Approved Prior Experiential Learning (APEL) Claim)	状況による	註1) 参照
WBL を通して個人の発達の計画 (Personal Development planning Through Work-based Learning)	レベル HorM (15)	省察的なポートフォリオ
継続された専門職としての発達 (Continued Professional Development)	レベル HorM (15)	省察的なポートフォリオ
コントラクト学習を通しての専門職としての発達 (Professional Development through Contract Learning)	レベル HorM (15or30)	評価的なレポート
WBL を通した専門的実践における技術と能力の開発 (Developing Skills and Competence in Professional Practice through Work-based Learning)	レベル HorM (15)	省察的な記録および口頭試験
ヘルスケアおよび社会的ケアサービスの効果的なケアの提供に関する技術と能力の開発 (Developing Skills and Competence in Effective Care Delivery of Health and Social Care Services: Work-based Learning)	レベル HorM (15)	学習契約の3者間の協議による negotiated tripartite learning contract
ワークベースプロジェクトの統合 (Integrated Work-based project)	レベル H (30)	10000-12000 語の評価的レポート

註1) 単位は、単なる職場での経験に与えられるのではない。職場で生じた学習が、コースやプログラムのレベルやアウトカムに等しいと説明できる場合において、経験から何を学んだのかを査定し、レベルとポイント数が決められる。

註2) 15 ~ 30cp が1つのユニットになる。100 ~ 180 程度のユニットが1つのコースをつくりあげる。

註3) レベルHはレベル3 (学士レベル)、レベルMはレベル4 (修士レベル) に相当の内容を示している。

表3 London South Bank 大学における WBL を通して取得できる学位

学位の種類	レベル
修士 WBL を通した専門職としての発達 MSc Professional Development through Work-based Learning	レベル M180cp (修士論文 60cp、または論文にかわるプロジェクトを含む)
卒後のディプロマ WBL を通した専門職としての発達 PG Dip Professional Development through Work-based Learning	レベル M120cp
学士 WBL を通した専門職としての発達 BSc(Honours) Professional Development through Work-based Learning	レベル H120cp

London South Bank 大学保健・ソーシャルケア学部には、さまざま専門領域があり、主なものを以下に示す。

- ・健康に関する専門職（作業療法士、理学療法士、放射線技師等）
- ・小児看護
- ・メンタルヘルス研究
- ・助産と女性の健康
- ・成人看護
- ・プライマリケアとソーシャルケア

ほとんどの領域では学士から修士までの課程をもっており、APEL を受け入れている。修士取得までの期間は、学業専従では2年間、在職しながらでは3年間程度である。修士では、10ヶ月間の研究経過のレポートを提出する。これに対し、教員は最低2名でチームスーパービジョンをする。

Ⅲ. 大学教育における看護現場と大学との連携

1. Middlesex 大学の地域看護学実習について

私たちは、Middlesex 大学3年次生の学習日（Study Day）を見学する機会を得た。これは6週間にわたる地域看護学実習の4週目に組まれた2日間の学内プログラムである。

プログラムの詳細は表4の通りである。学生は同じ実習グループの10名程度であった。講師は現場の看護専門職（主にCNSクラス）であり、地域看護学実習の指導者である場合が多かった。講義・ディスカッションを含めて50分程度であり、6セッション/日であった。講師は、学生の実習での体験を引き出しながら、看護専門職の役割や看護専門職の質の高いケアについて論じ、理論と実践の統合を促進していた。このように実習の途中に現場で活躍している専門職と直接接する機会が組まれていることにより、学生の動機づけがさらに高まり、後半の実習展開が効果的に展開されるように感じた。

また、学習日に組み込まれている学生フォーラム（Student Forum）では、実習する中でよかったことは何か、そうでなかったことは何かについて学生が順に発表していた。大学の教員が進行役を務めていたが、PCTの教育担当者もこのフォーラムに同席しており、学生から出されたよくなかったことに対し、状況や原因を確認していた。学生、教員、看護の現場が一丸となって、より

表4 Middlesex 大学における地域看護学実習の学習日（Study Day）の例

日	学習内容
1日目	感染予防、学生フォーラム、地域メイトロンの役割、ヘルスビジターの役割、リンパ性浮腫のケア、疼痛緩和ケア、
2日目	スピーチと言語、特別なニーズをもつ子どもについて、専門家としての発達、排泄ケア、子どもの保護、2日間の評価、

表5 PCT が企画した糖尿病のプライマリケアコースプログラム

日	学習内容
1日目	糖尿病の生理学・食事療法
2日目	1型2型糖尿病の治療 高血糖 低血糖
3日目	インスリン管理 糖尿病との生活
4日目	妊娠中の糖尿病管理 高脂血症の管理
5日目	合併症とケア 子ども・老人の糖尿病管理
6日目	糖尿病のプライマリケア

註4）他に4日間、自分の専門に間接的に関連する実習場を自分で選び、見学実習をする。教員は付き添わない。

よい実習に向けて建設的な話し合いをしていた。

以上のような学習日を含む実習展開については、大学側と協議しながらPCTの教育担当者が責任をもってコーディネートしていることから、学部教育に関して看護現場と大学が協働している様子が伺えた。

2. PCT 主催の教育プログラムを大学の単位に換算する場合

私たちはPCTの教育担当者が、PCTで企画した教育プログラムについて、大学のWBL担当者と教育のレベルおよび単位数を協議している場面に立ち会った。今回のプログラムは10日間にわたる“糖尿病のプライマリケアコースプログラム”であった。その内容について表5に示す。

講義に関しては、テーマ、時間数、講師およびセッションごとに明確な学習成果が記されている資料をもとにPCT側から説明があり、その後大学側と協議し、このプログラムはおおよそレベル2から3、15cpと判断された。

このように予め取り決めがあると、既修得単位の認定がスムーズになり、PCTでの学習から学位取得につながりやすいと思われる。

Ⅳ. 看護現場における生涯学習支援

1. Whipps Cross Hospital の Skills Lab のプログラム

Whipps Cross Hospital では院内にSkills Labがあり、

専門職のための卒後の技術研修の場として活用されていた。Medical Leads として医学教育の教授が1名おり、Clinical Skills Service Team のメンバーは Clinical Skills Specialist が1名、Clinical Tutor が3名、管理人が1名であった。今回、看護師である Clinical Tutor から話を伺うことができた。

今年度は看護師、助産師を対象に以下に示す4つのプログラムが用意されており、これらはCPDとしての位置づけである。いずれも1日の研修であり、午前中は講義、午後はデモンストレーションとシミュレータを使用しての演習になっていた。

講義は、技術に関することだけでなく、法的・職業上の倫理的問題も含まれていることが特徴的であった。Skills Lab 内での研修は1日であるが、それぞれの技術は終了後に臨床の場において Clinical Skills Specialist もしくは血液学 CNS のスーパーバイズを受けながら実施することになっている。

例として、静脈穿刺とカニューレ挿入コースにおいては、スーパーバイズのもとに静脈穿刺を10回、静脈穿刺とカニューレ挿入は6回、実施することになっており、技術を確実に習得できるしくみとなっていた。

- ・静脈穿刺とカニューレ挿入コース
- ・静脈内注入療法コース
- ・尿カテーテル法コース
- ・静脈内輸液法コース

2. Whipps Cross Hospital における生涯学習支援

Whipps Cross Hospital の Assistant Director of Nursing によると、病院の研修システムやプログラムの検討には London South Bank 大学の教員も参加しているとのことであった。そこで受けた研修を学位取得のためのクレジットポイントとすることができる。

現在、現任教育のコースは200から300ある。看護職者が現任教育の受講を希望した場合、その上司や教育担当と面接して受講が許可される。その際は、本人のキャリア発達とそのコースを取ることが職場においてメリットになるかの両面から判断されるとのことであった。コースの目的と内容によっては、病棟の配置換えが行われることもある。

例えば、糖尿病の CNS を取る場合、所属する病棟では該当する患者が少なく研修できないと判断された場合

などで行われる。1コースは約6ヶ月間で、そのうち7日程度は学習日となっており、大学内での講義を受ける。その他の期間は、コースの目的に応じた現場で働きながら研修を受けるそうである。

このように職場を離れることなく、CNS を取得できることは、本人のキャリアアップにつながるだけでなく、所属する組織においても利点は大きいと思われた。

V. 看護における WBL の評価と意義

看護における WBL には、1992 年以降の継続・高等教育法による看護学教育に携わる高等教育機関の大学への移行⁵⁾が関係する。つまり、1992 年以前は、大学教育を受けていない登録看護師がほとんどであった。その看護師たちも、おおそ15年以上の看護実践の中で様々な経験をし、様々な看護の技術を学んできている。それらの学びを大学レベルの学びへと高め、さらに実務に合った看護現場での課題に研究的に取り組み、学位取得につなげていくというものである。

このために、WBL では、個人の職歴やそこでの経験、組織や看護への貢献について記録としていくポートフォリオの作成が重要な鍵を握っている。このポートフォリオの作成を通して、これまでの学びを確認し、さらに必要な学びについて確認していくのである。ポートフォリオは、妥当な学びの成果をあげていくための根拠を提供するものである⁶⁾。

英国では、WBL の機会によって、個人のキャリアを発達させると同時に、現場の看護の質の向上だけではなく、チームとしての医療サービスを向上させることをねらっている。また、学びの成果が学位取得という目に見える形で現れるため、個人の学習への動機も高まる。その学習を支える組織も学習する組織へと発展していくという相乗効果が期待されている。

WBL の実際については、Work Based Learning in Primary Care⁷⁾の中で、次のように紹介されている。

実践家である学習者は毎日の実践場面を振り返り点検する。職場の指導者や大学教員等は学習者を励まし、実践を改善することへの動機づけを維持させていく。実践に基づいて自分で導いていく WBL における学びは、学術的な学びとして認められることで正式なものとなる。実践家は、彼ら自身の学びの責任として学位を得る必要

がある。そのために学習者は、自分自身の学びのニーズや期待される成果を明確に記録として残すことが重要である。また、焦点を当てるのは実践の中での課題であるため、実践家の学びのニーズを満たし、学びの成果は患者へ還元される。

WBL の実際やその成果については、年に3回程度刊行されているジャーナル Work Based Learning in Primary Care で紹介されているが、看護の質を評価する研究的な取り組みはこれからの課題のようである。

VI. 本学における WBL の活用

今回の研修によって、WBL は医療サービス全体の質の向上を目指したシステムとして国の政策に組み込まれ、臨床現場と教育機関が協働して取り組んでいることがわかった。

本学においても看護職の生涯学習支援は、理念として取り組んでいるところであり、個人や組織の学びを高めていく WBL に学ぶところは大きい。具体的には、以下の3つの側面での活用の可能性について考えた。

1. 本学卒業生の生涯学習支援

これまで1期生から3期生までの学生を看護現場に送り出してきた。看護職としての経験を長くて3年積んできたことになる。卒業生に対し大学の教員として効果的に生涯学習を支援していくためには、この経験を踏まえていくことが必要である。

その点で WBL からの学びを活用できると考えており、今後さらに WBL について深めていく内容として次の4点を整理した。①看護の実務経験とは何かを明らかにし、その経験を意味づけていくための要素について、②看護の実務経験から何を学んでいるのかを明らかにし、その学びに学術的な検討を加え、学びを高めていく要素について、③看護実践の中で、今抱えている学習ニーズを確認し、方向づけていく方法について、④学習への動機づけを支援していく方法について、である。①②にあげた要素とは、WBL として生涯学習を支援する意図的な関わりの中味やその方法に関係してくるものである。

2. 大学院教育での学習支援

大学院博士前期課程では、大半の学生が看護職として職場に在籍しながら学ぶ形をとっている。そして、在籍する看護現場の組織的な課題に研究的に取り組み、看護

現場の改善・充実を目指している。

大学院で学ぶためには、2年以上の看護の実務経験を必要としている。この実務経験が持つ意味とは何か。大学院教育の中でこの経験から何を引き出し、学びとして高めようとしているのか。その結果、何が高まったのか。この点については、今後大学院教育を評価し明らかにしていく必要がある。そのためにも、WBL から経験による学びを学術的な学びとして高め、評価していく要素を学ぶことは、本学での大学院教育の発展に寄与できるのではないかと考えている。

また、今後は本学卒業生の大学院への進学を期待しているため、本学卒業生の看護の実務経験からの学びを明らかにしながら、その他の看護職との経験による学びの違いを考慮した上で大学院教育を考えていくことも必要であると考ええる。

WBL では前述したポートフォリオにより、今現在の実務に関係する必要な学びを確認し、それに適した科目の選択や研究課題を決定していく。その過程での学びの成果がすぐに現場に還元されるしくみになっている。このポートフォリオについて英国から学び、実務経験の意味を確認していくことで、的を射たキャリア発達支援と現場の看護の質の向上につながっていくと思われる。

3. 共同研究での現地看護職の学習支援

看護実践の改善・充実を目指す現地看護職と大学教員との共同研究⁸⁾も、生涯学習支援の一つの方法として成果を上げてきている。より効果的に意図的に関わっていくためには、経験による学びを高めていく WBL から指導的あるいは支持的な支援の要素を学び、日本・地域の文化や看護職の教育背景などを考慮しながら岐阜県の看護職に合った支援方法を検討していく必要があると考える。この共同研究から個人や組織の学びが促進され、学習への動機づけが大学院進学へつながっていくことも期待される場所である。

VII. まとめ

今回の研修では、WBL のシステムの大枠と看護現場と教育機関との協働の現状や期待される成果について学んだ。WBL とは、実践を改善していくために、日々の実践を振り返りながら学習ニーズを確認し、今抱えている実践者個人や組織の課題に合った学びを促進していく

システムであった。そこには、実践現場と教育機関との協働が不可欠であった。そして、学びを確認していくための記録となるポートフォリオも重要な意味をもっていた。システムの中身を概観すると、ポートフォリオの他にも学びを促進し学習の動機付けを維持するための指導者の存在や多様なプログラムなどのしくみもいたる所でみられた。

これまでの2回の海外研修の内容を基に本学への活用の可能性を考えてきたが、今後はより具体的な活用方法を考えていきたい。そのためには、WBLとして看護の実務経験を評価していく要素や学術的な検討を加えて高められた学びを研究的に明らかにしていく必要があると考えている。それと同時に、ポートフォリオとして自分の経験を形にし、今後必要な学びを検討していくプロセスやポートフォリオの内容、およびWBLコースのカリキュラムなどWBLの実際について国際交流を継続しながら情報を追加し、Faculty Developmentの機会をもちながら本学の全教員とWBLの活用について検討していきたい。

謝辞

私たちの一方的な要望に快く応じてくださったロンドンのWBL関係者のみなさまに深謝いたします。また、海外研修の機会を与えてくださった、学長はじめ本学教職員のみなさまにお礼申し上げます。

文献

- 1) 服部律子, 小田和美, 両羽美穂子: 英国の医療におけるWBL (Work Based Learning) の実際 (第1報) —新しいNHSとWBLの概念—, 岐阜県立看護大学紀要, 6(2); 65-69, 2006.
- 2) 小田和美, 両羽美穂子, 服部律子: 英国の医療におけるWBL (Work Based Learning) の実際 (第2報) —プライマリケアにおけるWBL—, 岐阜県立看護大学紀要, 6(2); 71-77, 2006.
- 3) Middlesex University: National Centre for Work Based Learning Partnerships, [http //www.mdx.ac.uk/www/ncwblp/about.html](http://www.mdx.ac.uk/www/ncwblp/about.html)
- 4) London South Bank University Faculty of Health and Social Care Continuing Professional Development Prospectus 2006/07 London South Bank University 2006.
- 5) 宮本千津子, 田中克子, 服部律子, 他: 英国 (UK) における看護学教育について, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1); 109-115, 2003.
- 6) Linda Chapman: Practice development: advancing practice through work based learning; Work Based Learning in Primary Care, 2; 90-96, 2004.
- 7) 前掲6)
- 8) グレグ美鈴, 岩村龍子, 大川眞智子, 他: 共同研究実施者の意見に基づく事業の見直しと課題, 岐阜県立看護大学紀要, 5(1); 93-99, 2005.

(受稿日 平成18年12月6日)

(採用日 平成19年1月18日)